

長谷川朝子のアイデアノート



六十の手習い

学ぶのに遅すぎるといふことはない：という例えです。今月はその六十の手習いのお勧めです。

『男はつらいよ』の中では「四十の手習い」と言っていました。寅さんがその辺りの年齢設定であったためでしょうか？

すっきり定着してしまいましたね。実はこの私も「四十の手習い」でハープを始めたんですよ。晩学ながら頑張っていたら、私のお弟子さんを紹介したいと思えます。

61歳からハープを始められた青野優子さん。きっかけは、福島市音楽堂で聴いた、ハープの音色に魅せられて、だそうです。わからないところはきちんと聞いて、次のお稽古までにしっかりと



り練習して来られる姿勢は、お稽古ごとでは一番大切です。青野さんは人生や心の贅（ひだ）を音に紡いで、とても味わい深い演奏をされます。

弾かれなくなった娘さんのバイオリンをお父さんが弾き始めました。養護学校の校長先生



をされていた渡邊恵一さん。定年退職された翌月に念願のバイオリン教室の門を叩かれました。独学でピアノ

を弾き、在職中は入学式や卒業式で、管理職に就かれてからは子供さんたちの前で演奏していたそうです。練習も熱心ですし、もともと独学でピアノを弾かれるくらいですから、音楽的センスは抜群です。みるみる間にバイオリンも上達しています。みなさんのお宅にも眠っている楽器ありませんか？

こんなこともありました。

ある日突然、お弟子さんの息子さんから電話がありました。

「母が祖母の介護で実家に帰ったところ突然倒れ、手術になりしばらくお稽古を休む」という内容でした。月謝が銀行振り替えでしたので、「銀行の引き落としを一旦止めましょう」と申し出たところ、「ハープは母の生きがいですから、そのままにしておいてください」と、アナウンサーだったお母さま譲りの穏やかで訛りのない美しい日本語が返ってきました。お母さま思いのこの息子さんの電話の向こうからの声、忘れることが出来ません。その後奇跡的に回復し、倒れてから2ヵ月後再びレッスンに戻って来られました。元気になって、また習いたいという気持ち、生きる力につながっていったのでは？ と思います。

六十の手習いは、満足したレッスンと共に楽しい時間と心の通い合う仲間をつくることも長続きの秘けつです。その実践で、私の教室では気が合いそうな方お二人を前後に組み合わせ、レッスンの合間にティータイム



長谷川朝子さん

福島市在住。声楽家・ハープ奏者。長谷川音楽事務所、長谷川音楽スクール代表。大学講師やラジオのパーソナリティー、福島民友新聞連載「うたのふるさとを訪ねて」を執筆。また、全国の学校を回る演奏活動、番組審議委員、コンクール審査員を務めるなど多方面で活躍中。2013年に第23回みんゆう県民大賞芸術文化賞を受賞。

HPアドレス <https://hasegawamusic.com/>

イムを設けています。私もお弟子さんたちとの会話の中から多くのことを学びました。私と生徒さんの関係は、師であったり、時には弟子であったりです。お弟子さんたちのおかげで心豊かな日々を送れています。感謝！みなさんも今までの人生でやりたいと思っていたことを始めてみませんか？ 幾つになっても遅いということはありません。上達もしますし、それなりに形にもなりますよ。



▲レッスンの合間のティータイム。アナウンサーだった義枝さん☺